

終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の
検討に関わる看護実践に関する研究

学位論文抄録

2023 年 3 月

安藤 亮

終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の 検討に関わる看護実践に関する研究

学位論文抄録

本学位論文は、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践における看護師の困難や葛藤の軽減、および看護実践の促進により終末期維持血液透析患者が自分らしく最期まで生ききることに寄与することをねらいに、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因を明らかにすることを目的とした。

第1章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討の研究背景を述べた。終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践には意思決定支援の難しさに加えて、透析看護の特徴に基づく難しさ、課題がある。さらに、その実践には患者および医療者の両側面からの障壁があり、看護師は看護実践に葛藤や困難を抱えている。このような看護師の葛藤や困難は倫理的悩みにつながっている恐れがある。倫理的悩みは看護師の仕事の質やケアの質等に関連しており、看護実践上の重要な課題であり、葛藤や困難の解決が必要である。そこで、本研究では倫理的悩みを減少させることができる医療者の能力である倫理的コンピテンシーに着目し、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因モデルを立案し、関連要因の明確化を行うこととした。

第2章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護師のジレンマ・曖昧さに対する対処を明らかにすることを目的に看護師を対象とした半構造化面接を行い、得られたデータより逐語録を作成し、質的に分析を行った。その結果、ジレンマ・曖昧さに対する対処として【患者の真の思いとの対峙】【患者、家族、医師の共通認識の促進】【医師との信念対立がありながらも、患者らしく最期までよりよく生ききることに向けた医師との協働】【医療職者・介護職者間の対話】【透析見合わせの見極めのための身体状態の注意深い観察】【終末期医療体制への妥協】の6のカテゴリが明らかとなり、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践についての示唆を得た。

第3章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践尺度(Nursing Practice scale for Treatment and Care Policies: 以下 NPTCP)の妥当性・信頼性の検証を目的として、全国の日本透析医学会の認定施設、教育関連施設に勤務する看護師1000名を対象に、無記名自記式質問紙及びオンライン調査を実施した。第2章の質的研究の結果および先行研究をもとに、内容的妥当性の確保に努めながら、5因子23項目からなる尺度原案を作成した。その後、項目反応理論に基づく項目特性の検討、探索的および確認的因子分析による構造的妥当性、大出らの看護師の倫理的行動尺度改訂版との相関係数の算出による併存的妥当性、平均分散抽出による収束的及び弁別的妥当性、Cronbach's α 係数および ω 信頼性係数の算出による内的整合性からみた信頼性の検討を行った。その結果、5因子19項目からなるNPTCPについて、妥当性および信頼性が確認された。

第4章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因を明らかにすることを目的として、NPTCPを用いてKuljuらの倫理的コンピテンシーの概念分析から導出されたプロセスモデルと、Lazarusらによる心理学的ストレス認知理論を統合した終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因の因果関係モデルの検証を行った。全国の日本透析医学会の認定施設、教育関連施設に勤務する看護師2000名を対象に、無記名自記式質問紙及びオンライン調査を実施した。立案した関連要因の因果関係モデルの適合度は、RMSEA=0.035、CFI=0.938であり、統計学的許容水準を満たした。NPTCPに対する組織市民行動、倫理に関する知識、部署の組織風土、およびNPTCPの困難さに対するNPTCPは有意なパスを示した。これより、組織市民行動がとれているほど、倫理に関する知識を持っているほど、部署の組織風土がサポーテ

イブであるほど医療・ケア方針の検討に関わる看護実践ができていることが明らかとなった。また、倫理的悩みを軽減するための看護実践の困難さへの対処としては、相談等の問題中心の対処だけでなく、情動反応を調節する情動中心の対処の必要性が示唆された。

第5章では、総括として本研究により得られた知見に基づく看護実践への示唆、研究の限界と今後の課題について述べた。今後の課題として、調査対象を広げることでモデルの一般化を目指すこと、明らかとなった関連要因について、研修の実施等の介入により実際に看護実践が促進されるのかを介入研究等により明らかにすることが挙げられる。

これらは本研究における成果であり、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の質の向上や、看護師のジレンマや曖昧さ、困難さの軽減の一助となり、ひいては終末期維持血液透析患者が自分らしく最期まで生ききることに寄与すると考える。

主業績

No.	論文題目	著者名	発表誌名
1	終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践尺度の開発	安藤亮, 名越恵美, 實金栄	日本看護科学学会誌, 42, 263-270, 2022

副業績

2	終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討にかかわる看護師のジレンマ・曖昧さに対する対処	安藤亮, 名越恵美, 實金栄	臨床倫理, 10, 16-26, 2022
3			

その他の業績

No.	論文題目	著者名	発表誌名
1			
2			